



全櫻
傳姫
曙
草
紙

特 13
3098
4



門へ13
3098
4

櫻姫全傳曙草紙卷之四

江戸

山東京傳補綴

大吉

第十三

盲女小萩袖死雪中

所小ふくくまらりくくの宝刀抜けり竹よりと斬はけりこれ小蝦蟇丸
身はふくくく花をさる婦人くさるゆるる志は手紙をぬく我のふくく
中ゆと云野分の方呵々と打笑あまの女と侮くいつつともいつで計
且んや汝池の裏より鉄塔を出し我を水中か引入今又か山中小連来ハ
我の害一物を大奪を計不疑は我らまら来ハ汝と試人為あり覚悟
せよと又振上げ劍の下小蝦蟇丸山刀と投出婦人志すゆりひの理
權其刀ぬのづけりと敵とる公るれと察し我のふくく公の婦人の

昭和九年
七月二十四日
購求

眼力の通り我實に盗人あり然といへども婦人被害をばは其故詔る
ぞく権かりとらとく傍の古社を指しけし野分の方よりつゝ太刀
鞘におさめ前後おをくらり古社のうちおつりぬ切蝦蟇丸ひひくら
我彼池の辺におかしとく水上お帯おうめ往來の旅人これお拾取んと
それ時水中お引入とめ殺し衣服金銀をうりかてお業とん今日
しも已お婦人を引入ておめ殺しつゝ婦人の容貌養廉あるお迷て
一命おたすけこれお伴來より我愛情の油を察し今よりおを傾
我意はまらとく妻とありて生涯を安んじ婦人の今の手段をみるお
尋常の女おあはと頗武藝の妙所あり然といへども我術お敵とること
あはべうと婦人の衣服の襟をみるべしといおぞ野分の方襟を探り
入るべしつゝお打ん手裏剣を三本もくめひつけおめ蝦蟇丸
莞々と打笑され若我とばなうけひとて立所お一命を失ふべしといふ
野分の方彼が手練と感し且志のせらあるおすうとくおを折つとく
蝦蟇丸が容貌をみるお年紀は二十七八歳とわやく眉目お兼渾身素
雪のどく身材は六尺おちうじて世お希るお美男子ありこれおは
只彼との申しのとおく容貌のよれお目をくらめおしおあめくおいで
さうとくおんおお養男子あるお元來の娼婦俄にお動死殊更彼
の武藝の達するお尋常の者あるおよある者の零落しおこれ
おふとくおと察しとてとらお去べたおてお路頭お
倒し餓死より一旦彼お命お保後日良計とるおは
心おさめおんお妻おお公実お油お又お
は落花おのるお流水も又おわりのともおくおは
おは

打笑けしむ蝦蟇丸大なるまぢび我今妻のことも亡盲目とありこの用の
とね日来うと居つれどことまゝふあひびく養わらぬ彼と追出
まてのちうぐのひく欺べ婦人これ公得べと云さへつひ小使
かき家小飯り妻小萩小語けら今旧も京の町小出物買つてのへるこ
池小落さる婦人ななむけのげふよりわれ伊方のささきとひて迷ひ
のりたあふまぬよりのまりの痛しきふこれまゝ伴せぬ汝公
つひいさりりまわらせしこい小萩の元来慈悲の娘女あれは夫の
ことか信し情流しふあど野分の方したれとふ答てこれよりけ家小
とぞまりけりささく小萩と兄弟の娘とを庖厨かこさく炊水くむ
業とさせ野分の方の間をへらしたる所ふかこさく養妻の盲目丸幸
小密詔公文字ふかこさく語のひぬ一時蝦蟇丸おん身は伊人の
まじり果ふやと尋ける小野分の方つりりくつみ妻へ原福原の皇居
小仕へ一宦女あるが平家滅亡の刻に親族尽く失くたのむ方も多く
乳母の家小養ましく憂年月ぬささく頃日乳母おままり乳母子は
何某情ある者ふく妻公追出俄小憂目ぬえせつたりおん身も又
とぞ小鼻賤の人といええど何等の人どとふ蝦蟇丸もつりりく
つみ其へ伊賀の國山田郡の住人平田平四郎貞継法師の子なり今
源氏の代とまり世間もつりりくこればかり人ささめ山中ふかこ
住かりつひときとまげよとさるまふふあもあさく賊とありぬわたりて
こればかりおん身も我もさる小平家の重恩をうけらるまなれば夫婦と
あさもよれえめりささくやとやりのひく漸く小愛情流くさるそ
まぢりく月日をおくりりりかこさく梢の蟬の色もささり風の音小

驚ろととれば残る松さへ峯ふささしんをその時とかりぬいとのぶ
せれ谷うげのわが家小肌寒夜嵐かまの足耳小満りの樵歌牧笛
の色眼小渡るりの竹煙松霧の色のもかりまの者の住得ぬ所
小への神ど野分の方へ愛情小公ひれつびり暮しの苦おるで只
年の盛とささく色香の失んとかうは一向姿を粧こふの公を
へく貴族の胤とふひささく幼時へ賤家小育へ育るればわが住居も
あつめらちらせざりけりささく又嫉妬の悪癖起り小菰親子三人
とりまざりささく小養かぬやささく追出しぬとらげぐが丸を
のふとが丸のひけり兄弟の娘のあやもよけし今もささく
養たて船泊りの妓女ささく賣つるささく小菰親を得て小菰不日小
追出とべるとささく折とえ合せけり一時小菰が丸がささく

明者之四

ささくよりささくささく妻頃日推量とささくの上臆とささく
連来むし婦人のおん才のやじ妻小疑ささくはささくささく
盲とささくささく露ささくも恨むね公いささくささく
あつ語むささくささくささく丸のささくささくささく
うへをささく小福原の皇居お仕へささく宮女のささくあり我父の平家の重
思なうけささく人ささく平家一門とささく見捨がささくささくささく
ささく瓜追出さんとささくささくささくささくささくささくささく
用ふささく瓜夫婦の情とささくささくささくささくささくささく
ささく悪念をささくささくささくささくささくささくささくささく
ささく此家を出去ささくささくささく小菰泣きささくささくささくささく
兩人妻を追出さんと計ささくささくささくこれを推量つ此家へ前の



のりき
 野分の方蝦蟇
 九の毒とあり
 前毒小萩と
 雪中小追
 出松虫
 鈴虫兄弟
 の幼女と
 ひ打

明
 卷
 之
 四

苦いのり刃ハ紅色とありく紅蓮大紅蓮の衆生の如く黒髪
氷柱さうりく鈴をかけたるやうに人々をとりまゝにたれもこりり
忽枯木のてくありぬ兄弟の娘へららとあるがま丸おひ
情をかや〜母人とのみゆせて〜のびとつて母とえやう
歎けり小萩はる月もさよとえど毒目の人えさるうへ午足凍て
を去とあるひげしせやくの情なく一夜ハ此家よあをせてうといひ
ひささ〜あぞのくまで邪見のや丸も少〜公たゆ〜野分乃方
そのつら瓜情のや丸が背中をとつためくはまんが丸うらうら
のまや〜た女あうあうふりふりもゆ〜やあ〜此子とのや丸目乃
前なく打殺〜と〜野棒をさう〜連打お打ひと〜兩人の苦痛なく
どのなやと叫〜たあ息とり小萩へ子どのが苦しきあけて五臓六腑も
さのち〜あひや〜と〜ま〜もあ〜め〜あ〜ん
さう〜独〜あ〜と〜彼等が打うふさ〜ひ〜めく足を
あ〜の〜起〜破笠と〜杖〜二〜一〜歩〜母あ〜
母子あ〜我等もその不連去〜さ〜さ〜
が〜兄弟あ〜打〜苦〜ゆ〜兩人が〜ひ〜どの〜ん〜丸〜打
ゆ〜ら〜ら〜た〜思〜愛の〜紐〜つ〜あ〜と〜四子〜山〜の鳥
あ〜も〜あ〜あ〜あ〜雪のうらふ合破と伏せ〜り〜ど〜あ〜げ〜る〜野分の
方〜が〜丸〜を〜と〜め〜〜又も兩人と打〜と〜小萩〜あ〜等〜苦〜し〜色〜が〜あ〜い
た〜ど〜胸〜さ〜へ〜ら〜ら〜盲目の子ゆあ〜の闇の雪道を〜ら〜つ〜ま〜り〜び〜つ〜出〜去〜る
已〜日〜も〜ろ〜果〜け〜し〜野分の方が丸が手〜推〜し〜一〜間〜の〜う〜ら〜ら〜入〜り〜又〜酒
を〜の〜め〜あ〜く〜ら〜ら〜は〜権時を〜ら〜ひ〜野分の方打笑彼を追出〜して

かろく胸へくれうとめ色盲目の才わくゆる雪中死をあらんがも遠く
へ去得まど若ちうたのりやと凍死あじ人の目小わらぬのうらな
ちうぐしうひぬと耳小のてさやれけさばが丸いふもさうとさひのそ
と瓜あげて裏口より走り出跡をささひく追行り切痛しは兄弟の
娘より左右の柱小むひつけらまほしく打まき簀子のうふ倒伏さう
正氣もさうりけら姉の松虫やうく頭とのび鈴虫とさのび色ふとぐ
妹も頭とのびのひうへさぞなやうら痛むらん妻も堪ぐさや松虫い
我々が苦痛へちのびもせめ吐痛しは母人より寒氣くげは雪の夜死
たどりゆたむひつと今ごろは途中や凍死やらむひつとんとり跡を
らうらんとささむかくうらんせんさほささむひつとんと且父うへ
たのつれば恨むさ道理は只情多るかの土臈なりとさめつとさる

ひび鈴虫も色ぬまのびしせひり世界の表と兩人が死ふせあつた
ささひさうおしも峯越の雪巻風ささかじり兩人を嘯と吹倒又も正
氣を失ひたりさうふらぬ丸ハ雪中の足あふぬ公のてふ碎瓊乱玉死
りじて小萩がのらぬささひけり果しとかの古社の軒下みたらあふ
死ふらんさささ只糸のやうなれ息のささひりねを怯るく縊殺て
屍を肩小ひたけけ人の通ぬ山奥小ゆさささ流谷谷底小投とぞ飯
けれ誠是例とさる悪業あり

第十四 二人比丘尼發心記

かろく次日小つらがる九兄弟の娘小ひさひさ詞をかりげ母の志め
ゆえ懲りめの乃不追出つればさるるささふとさるんはさ我不そひ
此家小ささうとさささ憐れさささ養育今少一おひささ賑



野の
 鈴虫
 兄弟
 の
 初
 女
 子
 常
 小
 打
 擲
 責
 つ
 ぶ
 虫

味
 卷
 之
 四

妹ハ五把の柴をりまよ代はく日くの費ふたとし二把ふとも不足せむ
 のげく痛打べーかあうぞ急べうぞうぞういけぞう追りたり
 山家ふかひらりとつども母の情あうこれまよる業を仕られぬ山路乃
 案内まよるふらうぞ峨くう高山鬱くらう繁峯道もくら
 木ののくぬけののり白うら足ハ荆棘の為不紅瓜ふり黒く
 され髪ハ蜘蛛の絲ふまうう紫を刈あぞううらふびと年足るへ
 身もたゆ堪がじされまよめの数刈まよ憂目ふかべーとつ
 ぬいぞ刈けるふのの辛く七把の柴を刈けども妹ハワガふ十歳の
 幼女まよるやうく三把とあり日己ふあふたぬまよのふむうひく
 妻が柴まよめの数ふ二把たぬ此終家ふ飯るべ心痛打ぶじま
 日にくられんとされぬぬ川人便もはこいふせんくこのひと哭られ

松虫妹が背ハ撫つまう嘆と妻が刈一此柴のうらぬ二把けてそ
 の柴の数と合くまよ一氣づひまよといひくれハ鈴虫のひくまよあり
 のひうれ柴の数不足くかん打とまひま人松虫のまよふまよひ
 きたく難義とのうれべーくや夕飯調むれ比まよむくうらま
 ぬりの時うらまは月人の怒ふかべーくぬりま人かまよ
 教をえせるまよひつ鈴虫かまよの髪をむさのげま物の塵打拂く
 うせ兩人とも不柴を肩腰もらぬむり重となふまのびと家ふら
 ぬ野分の方兩人が柴をあらめまよ忽眼尾ひたのげ松虫とまよ
 のひくま悪奴妹まよめの数刈つふ小汝年かまよのうらまよ二把
 まよ不足せむ畢竟物不怠るゆまよ後日の懲めまようく憂目
 えまようくくれ本をころく打くまよ鈴虫はまよるうのひくまの柴の

らうぶるの原まが罪かり妻を打つめひうへんぬはてよとひて野分の
方の袖ふとれを松虫おのけそあるさうつりつりつり妻をくつんと
あふもいつてり実とまふへたりのひふとあるをさうり居よとまうり
つ覚悟の体をふるふまか鈴虫が胸の苦しさのふるぐもあつて野分の
方松虫をさうつ柴小屋あつて行つてはなれなく赤裸とる高年
小手ふるさう捨置鈴虫おひひはも我意不背のひのこくさう
あがしとくえくおけのひひてあつとまれば鈴虫の毛いさうさう
かましく只ちのひ泣居さうかを時うつて野分の方の戸あ入り
くねありふつた小夜もやうくふけぬ色巴峽の猿の一叫け強さ結も
哀と催と種とあり寒月皎々と光く壁のやれをり飯篠群竹吹
るしと朔風松虫が肌ふ冷とわりやうら氷のこくさう今も絶入をる

あちまをわら折しも鈴虫へ抜足し柴小屋来り袂ふる世一鬼の
飯さうり松虫ふるめおの直さる物をぬさう打させおさう人
とぞな餓むつらん才うちの痛はうふそや妻ゆふかく苦めやす
その勿体あまよとのひさうりさうりかむえと色をたて哭けは松虫
めらうさうさめ若彼人睡を醒さばとあつと又憂目るべとさう
ゆさう麻よ妻ふかまよとあるれさう萬を胸ふめさうめさうさう
出さねども母小別さう我のこむ力ふとふとさうさうさうさうさう
と推量胸もさうれとひやくとあひ涙ふむせびりあうさうのさう
朝ふり鈴虫野分の方あひのこむさうさうさうさうさうさうさう
柴小屋ふりさうれさう後日ふ十把づの柴をちるべそれ得心さう
ゆつりさうさう松虫何ふせんあふせさうむれはさうさうさうさうさう



ちぶくいましめなされしゆりり野分の方おのほろ人お越る子な
 隣り櫻姫の行方いと片時も忘るる愁々たるそれふひたるくかく
 人の子なあむむその甚しむいふぞや誠是とらひまねる悪婦なる
 さろふ兄弟の子ごの毎日山小いころ柴を刈人もうよめ山奥
 まぐりけりけり一日松虫山石のまふ屍くく休息偶あころか
 顧小谷底のむくさえる雪のうらふ一の屍よとこりめ頻ふ心動
 若母人あめめうとさふなまのひ兄弟手なころあひく岩のま
 瓜段ふく辛くく谷小下りるくげよ果くく母の屍あり此ころ
 つく雪天小餓がらる山鳥屍のうく群集くくの悲やと走りより
 ありか地へこちより群集せんとく木の枝をさくゆりく
 追中兄弟屍ふりつと母人よらめあがれ山奥へ来と死あひく

乃ふくく迷ひく凍死やふりふらう縊まやあふあめとひまや
 いふまでも再のひんんたのく邪見の呵責か堪忍くく世に
 かひさのありさめや情まの汚婆やあふ母人よとつて死をゆり
 動くかころぐふくたなく天をのあさく歎く地小倒く悲
 又瓜りく身かころ色もむらふさけびく狂人のくおひけふ
 光景哀といふもあうらうられより後七日くく小兄弟ら未花
 瓜供し水を手向念仏とるくさあひらり柳人の屍の腐爛く日く
 変ると九相の詩小賦く無常の賦くつねく今更いふべくものねど
 のく記く見女勧善の一端とくも兄弟の子ども七日めふゆこ
 足れりといは画影のくもみく古の人ともおがえど髪蓬の如く乱
 五体へ青く腫爛目の玉の鳥の乃ふくひとされ膚ハ腐やとく齒

しどろろとつらつらとふむむと念仏ねんぶつやせと西かの方かたへかゝむけられ鈴虫すずむし
らいたる掌てを合あはせ阿あ弥陀いだつた仏ぶつととと松虫まつむしも西かへむむ母ははうととば
連つら小こ道みち守まも玉たまと念ねん一いつ小こ石いしと拾ひろつ袂たもとのし兄弟あにがた抱かか合あへ谷や川がわの泳およぎ小こ舟ふね投なげ
らる折をりしも背後うしろの木き蔭かげより中なかへ兩人ふたりと中なまるべうずさるる色いろの
一人ひとりの沙い門もん走いり出いでかゝらめけし兄弟あにがたいひあひあふること驚おどろかす
覚おぼ悟ごまらめく死しする者ものとほく死しせむられしとつ沙い門もんいづく父ちちと失しる
と思おもひつめさるるわどるんばささめくやいざこいこれのんその仔こ細こつとまど
語かたべとつ松まつ虫むしをちちめ死し小このどと御ご出家しゅつが小このひん幸さいありあるま
小こまらる何なになりつとつべ死し子こ細こと語かたべとささめくおねがうへ引ひ寄よりて来き世よに
たもけむられし妻つまの松まつ虫むしとつこれるる妹いもうとと鈴すず虫むしとつあり父ちちへ下した野のの國くに
住すま人ひと小こ須す田た弥や兵へい衛ゑとつ小こ曾その二に門もん不ふはへ者ものあつと去いる壽じゆ永えいのつとめ

木曾殿きそとのとの亡なす御ご一いつ門もん不ふはへ者ものあつと去いる壽じゆ永えいのつとめ
妻つま兄弟あにがたあまうけつとつ三年さんねんとつ小こ舟ふねあまうけつとつ母ははへ小こ萩はぎとつせが前まへの月つき雲ぐも中なか
小こ死しこれるるその遺い骨こつねわくゆと語かたべと蝦かま蟻あま丸まるがごと野の分わけの方かたの邪よこしま見みる
と母ははの死しの七なな日ひふりつとつ知しる世よの無む常じょう公こう悟ごり死し人ひとと思おもひはめとつ志こころざし
まむ細こ細こ小こ舟ふねとつ哭なげまらかの沙い門もんもいと哀あはれとつ黒くろ漆しの袖そでをまわり
中なかありつとつ我われへ法はふ然ぜん上人じゆんじんの徒と弟てい小こ常じょう照しやう坊ぼうといふ者ものあり今朝けさ上人じゆんじん我われを
召めさむひと命いのちける昨夜さくやの夢ゆめ小こ佛ぶつのゝめりく愛あい宕だうの山やま奥おく小こ兄あに弟がたあつ孝かう公こう
泳およぎ幼こ女めのう今いま已ま宿しゆく世よの悪あく報ほう消しょう滅めつとつ喜が提たいのり入いるべし時ときつとつ
く中なかありつとつ教きやう化くわ徒と弟ていとつとつ告つげ玉たまひぬめ小こ我われ彼か所ところ小こつとつ
尋たずねの中なかありつとつ去い年ねん配はい所ところより飯い浴よくとつ後のち上かみ人行じんぎやう状じやう繪え詞し小こ建けん永えい一いつ年ねん
行い歩ふもあまらざればは我われ小こうとつ彼か怨うらみとつ尋たずねよ小この告つげ小こなふべうとつ

兄弟の幼女母の死の
 九相の変とて観く
 無常の世と悟く
 溪水自身と投と
 常照阿闍梨
 これをそのめ教化
 して法然上人の
 徒弟とせよ
 二人比丘尼と
 つかは是なり



蕭疎蔓
 草遂纏
 骨散彼
 捨斯求難
 得瓜髮分
 離盈野外
 頭顱腐敗在
 巖端西陵雨
 夕年々朽東
 岱風時處々殘
 忽作龍門原上
 土枯榮不識昔
 誰棺



若しふのこれ
 くらひきよと
 いかんやめ
 いあしん人

と命に委ふふり今日此山中を尋ふ果しと沙等ふのめ初しととも
我説をきけ夫女人の高臺の閣もへてられ梵衆梵補の雲を望と
るく帝釈柔軟の床も下これく三十三天の花をのりわそぶとふり
六天魔王の位四種輪王の跡望まぎく絶くわびぬとど生死有漏の果報
生滅の拙きもふもあは煩悩の山なぐく五障の雲を時あき愚
痴の海深く三徒の波のぬ間とはいふんや天壽をらめて非命
小死人と罪深き業まぎとや三途八難お起し六趣四生小死をぬけ
母のりとも深き苦なうんより上人の徒弟とまり剃髮深衣小婆なうて
專修專念の行者とまり龍女が速成をたるとび如説の往生を念ふ
あがく母の菩提をらひくかは蓮をねがふとや檀林皇后の九相を觀念し
と素懐とらげ法如禪尼中將の繼母の憎をらけく正覺小飲しる例も

